

女性の改姓時の気持ちと現在の夫婦別姓態度への影響¹

Women's feelings about changing surnames when getting married, and the influence on their attitudes toward couples with separate surnames

趙 丹寧* 山本 陽一**
ZHAO, Danning YAMAMOTO, Youichi,

What do women feel when changing their maiden names? Do these feelings influence their attitudes toward couples with separate surnames? This survey was conducted among 325 Japanese women and factor analysis found feelings as 1) regret and loss of their maiden names, 2) a feeling of new surnames not aligning with who they are, 3) a sense of unity and joy in new surnames. Notably, “a feeling of new surnames not aligning with who they are” is found more in working women than women without work. Logistic regression analysis found that “a feeling of new surnames not aligning with who they are” then led to women's current support to separate surnames, while “a sense of unity and joy in new surnames” then led to women's current resistance to separate surnames. This study showed that the change of surname may cause a psychological burden on women and hinder their social advancement, and the feelings at the time of surname change may even affect their current attitudes of separate surnames. The above results might bring a new perspective to the discussion on the selective married couple's surname system.

キーワード：結婚による改姓（Marital name change），改姓の気持ち（Feelings about changing the maiden name），夫婦別姓（Married couples with separate surnames），女性の就業（Women's employment），日本人女性の心理（Japanese women's feelings）

問 題

日本では夫婦同姓制度が法律により定められているが、1990年代より、婚姻時の「選択的夫婦別姓制度」の民法改正案が国会に提出されるようになった。「選択的夫婦別姓制度」改正案は、男女共同参画の施策として位置づけられており、賛否両論の論争が繰り返されてきた。2015年と2021年に、最高裁判所は二度も夫婦別姓を認めない民法の規定が合憲であるという判断を示し、制度の在り方は国会で論じられて、判断されるべきだとも指摘した。そのような判決を再三出さなければならぬ背景には、日本では夫婦別姓に対し、社会の欲求が高まりつつある一方、抵抗も根強く存在することが推察される。

¹ 本研究は、2021年日本心理学会第85回大会で発表された内容の一部を加筆・修正したものである。

* ちょう・たんねい 埼玉大学留学・国際交流課留学生相談室非常勤相談員，感情心理学，文化心理学

** やまもと・よういち 筑波大学人間総合科学研究科客員研究員，社会心理学

夫婦同姓制度は、表面上は夫婦どちらが改姓してもよいとされる。しかし96%の夫婦は妻が改姓していること（厚生労働省、2016）を鑑みると、妻の改姓を意味すると考えられる。ゆえに夫婦別姓の制度は、妻が改姓しないことを支持すると考えられる。そこで本研究では、夫婦別姓への賛成態度を「妻が改姓しないこと」への賛成態度として捉える。

アメリカやイギリスなどの欧米諸国でも、結婚時に妻が夫の姓に改姓するのが伝統である。夫婦別姓の法律ができてから、女性は改姓するかしないかの選択権（Marital name choice）を得る。改姓は単なる名前の問題ではなく、社会的な力の問題であり（Boxer & Gritsenko, 2005）、改姓への態度は男女平等などジェンダー態度の指標であることが指摘されている（Hamilton, Geist, & Powell, 2011）。そうした研究の展開や社会のフェミニストの台頭、男女平等のジェンダー観の浸透があるにもかかわらず、欧米では現在も妻の改姓は強く支持されている（Hamilton et al., 2011 ; Robnett & Leaper, 2013）。例えばアメリカでは、婚姻時の改姓はまだ主流であり（Gooding & Kreider, 2010）、女子大学生の大部分は改姓の伝統に従おうとし（Robnett et al., 2013 ; Scheuble, Johnson, & Jonson, 2012）、ここ数十年間の女性の改姓態度は大きく変わっていない（Scheuble et al., 2012）。そうしたことの原因は、改姓しない女性やその夫に対する社会のネガティブな評価であるとされる（例えば、Robnett, Underwood, Nelson & Anderson, 2016 ; Robnett, Wertheimer & Tenenbaum, 2018）。

このように日本でも欧米でも、改姓に対する議論が盛んに提起される一方、改姓の伝統は変わらないままであり、夫婦別姓に対する社会の欲求と抵抗が共存している。夫婦別姓の是非を論じる際、改姓が女性にもたらす心理的影響は重要な検討課題であると考えられる。特に改姓した際に、女性はどのような気持ちを持ち、その気持ちが彼女たちの現在の夫婦別姓態度にどのような影響を与えるかを知ることが重要であると考えられる。

女性の改姓時の気持ち

女性の改姓時の気持ちに関する先行研究はまだ数少なく、特に実証研究は乏しい。文化人類学の研究では、Boxer and Gritsenko（2005）はアメリカ人女性とロシア人女性を対象に、改姓経験や改姓への態度についてインタビューを行った。改姓時の気持ちに関して、アメリカ人へのインタビューでは、多くの改姓した女性はアイデンティティに言及し、旧姓を手放すことへのためらいと後悔、つまり旧姓への未練とアイデンティティの喪失感を示した。一方、改姓によって新しい家族との一体感を示す回答もあった。ロシア人のインタビューでは、アメリカ人サンプルと同様に、旧姓への未練とアイデンティティの喪失感、新姓による相手の家族に飲み込まれる感覚や、自分らしくない感覚などのネガティブな気持ちと同時に、新しい家族と一体になったことへの満足感などのポジティブな気持ちも報告された。以上をまとめると、改姓時の気持ちには、旧姓への未練・アイデンティティの喪失感、および新姓の自分らしくない感覚といったネガティブな気持ちと、新しい家族との一体感と喜びなどのポジティブな気持ちがあることが示された。

旧姓への未練・アイデンティティの喪失感、および新姓の自分らしくない感覚といったネガティブな気持ちは、他の研究でも指摘された。Falk（1975, 1976）は、改姓はアイデンティティの苦闘と密接な関連をもつことを主張した。Dralle and Mackiewicz（1981）は、名前の変更が個人に与える

影響の研究を概観し、改姓は個人の自己肯定感など自己イメージを変化させると考察している。加えて実証的研究として、アメリカのアンケート調査では、アイデンティティ喪失への恐れは、女性が改姓しない理由として多く挙げられていた (Duncan, Ellingsaeter, & Carter, 2020 ; Hoffnung, 2006 ; Robnett et al., 2013)。Maher (1999) は改姓した女性は、これまでの人生が否定されて夫の家族に取り込まれる不快感があることを報告した。日本の社会学のインタビュー調査では、菊池 (2009) は女性の改姓しない理由は、新姓で呼ばれることの違和感であることを報告した。また、法律評論では、榊原 (1992) と赤石 (1997) も、改姓が自己喪失感などネガティブな気持ちをもたらすと論じている。

一方、新しい家族との一体感と喜びなどのポジティブな気持ちも、他の研究で指摘された。先述した Maher (1999) のインタビュー調査では、改姓した女性には新しい家族との幸せな人間関係を他人に示し、自分の過去を変えられる喜びといったポジティブな気持ちもあることが報告された。

改姓時の気持ち、平等的な性役割態度および仕事の有無との関連

Taniguchi and Kaufman (2020) は、日本版総合的社会調査 (Japanese General Social Survey, JGSS) データを分析し、男性は外でお金を稼ぎ、女性は家を守るといった伝統的な性役割態度を持たない人、つまり平等的な性役割態度を持つ人は、より夫婦別姓を支持することを示した。

平等的な性役割態度は、有職の女性は無職の女性より持つとされる (例えば, Thornton, Alwin, & Cumburn, 1983 ; Suzuki, 1991)。そのため、有職の女性はそもそも改姓したくないという可能性がある。また、結婚後に改姓しない女性は改姓した女性と比べ、職探しと持続的な学習に対しより積極的であり (Farley, 1970, 1975)、キャリア志向で仕事のステータスが高い (Hoffnung, 2006 ; Johnson & Scheuble, 1995) などのことが示されているため、改姓は女性のキャリア形成に負の影響を持ち、有職の女性にとって不利益なことである可能性が推測される。

この推測は他の先行研究とも一致する。改姓は仕事の実績と信用を切り離しかねなく (榊原, 1992)、クライアントに忘れられる心配が付きまとい (赤石, 1997)、仕事先での対応が面倒である (Maher, 1999) など、改姓の女性に仕事上の不利益をもたらすことが報告されている。

以上の知見を踏まえると、改姓時に有職の女性が、ネガティブな気持ちを経験しやすいことが予測される。

改姓時の気持ちが現在の夫婦別姓態度にもたらす影響

改姓は、結婚というライフイベントの一部である。過去のライフイベントは、人の現在の精神的健康のみならず、アイデンティティや自己概念 (例えば, 高村, 1997 ; 浦上, 1996)、信仰 (例えば, Hussain, Weisaeth, & Heir, 2011 ; Albrecht, & Cornwall, 1989) などの価値観に様々な影響をもたらすことが報告されている。そのために、改姓時の気持ちも、女性の価値観、特に現在の夫婦別姓態度にも影響をもたらすことが考えられる。

本研究の目的

これまでの研究を概観すると、女性の改姓時の気持ちとその影響は、文化人類学、社会学、社会言語学、法律学などの分野で、評論もしくは事例研究として検討されてきた。その中で実証的研究はまだ蓄積が乏しく、特に改姓時の気持ちと現在の夫婦別姓態度との関連についての研究は行われていない。

そこで本研究では、女性の改姓時の気持ち、およびその気持ちと現在の夫婦別姓態度との関連を検討する。目的1は、女性の改姓時の気持ちを測定する。改姓時の気持ちに関して、新姓を使用する場面における気持ちを測定する。新姓の使用場面に着目した理由は、新姓で呼ばれる時に生じる違和感（菊池，2009）や、夫の家族に飲み込まれた感覚もしくは新しい家族への一体感（Maher, 1999）など先行研究の知見により、新姓の使用場面では様々な気持ちが起きやすいと推測されるためである。また、前述したように、平等的な性役割態度を持つ人は、より夫婦別姓を支持すると考えられるため、改姓時の気持ちを測定する尺度の妥当性の指標として、平等的性役割態度を使用する。

目的2は、改姓時の気持ちと仕事の有無との関連を検討する。目的3は、改姓時の気持ちが現在の夫婦別姓賛成度にもたらす影響を検討する。予測として、以下の仮説を立てる。

仮説1：改姓時に、女性は相反する気持ちを体験する。つまり、旧姓への未練と喪失感および新姓の自分らしくない感覚といったネガティブな気持ち、ならびに新姓の一体感と喜びといったポジティブな気持ちがある。

仮説2：有職の女性は無職の女性より、旧姓への未練と喪失感、および新姓の自分らしくない感覚といったネガティブな気持ちが多く、新姓の一体感と喜びといったポジティブな気持ちが少ない。

仮説3：改姓時の気持ちが現在の夫婦別姓態度を予測する。具体的には、旧姓への未練と喪失感、および新姓の自分らしくない感覚といったネガティブな気持ちは、現在の夫婦別姓賛成態度を強め、新姓の一体感と喜びといったポジティブな気持ちは現在の夫婦別姓賛成態度を弱める。

方 法

調査手続きおよび調査対象

機縁法により、東京都内およびその近辺に在住し、結婚時に改姓した女性に本調査への協力を依頼し、承諾した人を対象に、2015年7月から8月に質問紙調査を行った。事前連絡と確認を行った上で個別訪問もしくは郵送により330名分の調査票を配布し、325名の回答を得た。依頼時には、書面で倫理的配慮に関する説明を行い、回答を拒否または中断する自由は保障され、回答はすべて無記名で行われること、調査参加への同意の確認は質問紙への回答をもって行うこと、調査は第一著者が当時在籍する博士前期課程の社会調査法授業の一環として、担当教員の承認のもとで実施されていることを説明した。

質問紙の構成

改姓時の気持ち 結婚直後（一年以内）に、新姓使用場面での気持ちを尋ねる項目である。当時第1著者が在籍していた博士前期課程の大学院生らで、本研究の仮説をもとに検討し、合議により14項目を作成した。4件法（1. 全く感じなかった-4. かなり感じた）で尋ねた。

平等的な性役割態度 平等的な性役割態度スケール短縮版（SESRA-S）（鈴木，1994）15項目を用い、5件法（1. そう思わない-5. そう思う）で尋ねた。

現在の夫婦別姓賛成度 NHK世論調査部（2014）からの抜粋である。「1. 当然、妻が姓を改めて、夫のほうの姓を名乗るべきだ、2. 現状では、妻が姓を改めて、夫のほうの姓を名乗ったほうがよい、3. 夫婦は同じ姓を名乗るべきだが、どちらが姓を改めてもよい、4. わざわざ一方に合わせる必要はなく、夫と妻は別々の姓のままでよい、5. その他」という5項目からなり、択一法で回答を求めた。

個人属性 年代、改姓時の仕事の有無について尋ねた。

結 果

回答者の内訳

回答者のうち、20代～30代が20.7%、40代が41.5%、50代以上が37.8%であった。改姓時に仕事を持つ女性は76.7%であり、その中で、職場で新姓を使用した女性は70.6%（全体の54.2%）であった。

各変数の基本的検討

改姓時の気持ち 第一の目的に基づき、改姓時、新姓使用場面での気持ちに関する14項目の因子分析（最尤法、プロマックス回転）を行った。因子数の決定は、固有値の減衰状況（第1因子の固有値は5.56、第2因子の固有値は2.10、第3因子の固有値は1.24、第4因子の固有値は0.78であった）および解釈可能性の観点から総合的に判断し、3因子を抽出した。その結果をTable1に示す。回転前の累積寄与率は63.40%であった。各因子に含まれる項目内容に基づき、第1因子は年賀状などこれまで旧姓で名乗ってきた友人・知人との交流や、初対面の人との交流などにおいて、旧姓を名乗れないことの寂しさと解釈し、「旧姓への未練と喪失感」と命名した。第2因子は新姓で呼ばれたり手続きをしたりする時にしっくりこない、自分らしくないという感覚と解釈し、「新姓の自分らしくない感覚」と命名した。第3因子は年賀状などで新しい家族の一員として友人・知人に知らせることや手続きで新姓を使うことの喜びと解釈し、「新姓の一体感と喜び」と命名した。 α 係数は順に.84, .86, .82であった。

Table 1 改姓時の気持ち (n=308)

(最尤法, プロマックス回転)

項目内容	M (SD)	F1	F2	F3
F1: 旧姓への未練と喪失感 ($\alpha=.84$)				
12 年賀状や結婚のお知らせのはがきで新姓の下に自分の「名」を書くことに違和感を持った。	1.96 (0.83)	.79	.08	-.01
14 結婚後, 初対面の人に名乗るとき, 旧姓で名乗りたいと感じた。	1.69 (0.81)	.75	-.04	-.12
7 改姓後の友人に自分の旧姓を知ってほしいと思った。	1.78 (0.77)	.67	-.06	.16
11 旧姓の印鑑を使えなくなったことに寂しさを感じた。	2.08 (0.87)	.65	.13	.07
4 改姓前からの友人に新姓で呼ばれたとき, 寂しさを感じた。	2.02 (0.88)	.60	.15	-.06
10 改姓後, 夫の家の墓石に「〇〇家」と書かれているのを見て, 寂しさを感じた。	1.93 (0.90)	.52	.04	-.05
6 改姓前の友人と, 改姓することによって距離が遠くなる感じがした。	1.53 (0.70)	.51	-.10	-.01
F2: 新姓の自分らしくない感覚 ($\alpha=.86$)				
1 病院や銀行など公共の場で新姓を呼ばれるとき, 違和感を持った。	2.83 (0.95)	-.09	.95	-.04
2 新姓を呼ばれたとき, 自分が呼ばれたのではなく, 他人が呼ばれたように感じた。	2.73 (1.00)	-.07	.91	-.01
8 改姓後書類等にサイン・捺印をするとき, 違和感を持った。	2.32 (0.96)	.30	.56	.05
3 改姓に伴う様々な手続きにわずらわしさを感じた。	2.92 (1.04)	.13	.51	.01
F3: 新姓の一体感と喜び ($\alpha=.82$)				
9 年賀状や結婚のお知らせのはがきで新姓で出せることが嬉しかった。	2.45 (0.88)	-.07	.06	.88
5 改姓後書類等にサイン・捺印をするとき, 喜びを感じた。	2.35 (0.85)	.02	.03	.79
13 改姓前からの友人に新姓で呼ばれたとき, 嬉しかった。	2.08 (0.77)	.09	-.10	.67

注) 各因子間の相関係数は, F1-F2で.69, F1-F3で.26, F2-F3で-.24であった。

改姓時の気持ちの3因子と理論的中間値との比較 改姓時気持ちの3因子の平均値と理論的中間値(2.5点)との差の検定を行った。「旧姓への未練と喪失感」($M=1.86, SD=0.60$)は理論的中間値より低く($t(324)=34.53, p=.000, d=1.51$), 「新姓の自分らしくない感覚」($M=2.70, SD=0.83$)は理論的中間値より高く($t(324)=6.52, p=.000, d=0.34$), 「新姓の一体感と喜び」($M=2.23, SD=0.72$)は理論的中間値より低かった($t(324)=17.70, p=.000, d=0.53$)。

改姓時の気持ちにおける年代差 年代を20代~30代, 40代, 50代以上という三つの群に分けて, 改姓時気持ち3因子の平均値に対し, 一要因分散分析を行った。「旧姓への未練と喪失感」($F(2,321)=1.77, p=.172, \eta^2=0.01$)と「新姓の一体感と喜び」($F(2,321)=2.57, p=0.08, \eta^2=0.02$)に年代の差がなかった。「新姓の自分らしくない感覚」($F(2,321)=16.33, p=.000, \eta^2=0.09$)に年代差が見られ, 多重比較の結果, 20代~30代($M=3.07, SD=0.73$)が最も高く, その次は40代($M=2.78, SD=0.76$)で, 50代以上($M=2.41, SD=0.86$)は最も低かった。

平等的な性役割態度 平等的な性役割態度スケール短縮版(SESRA-S)(鈴木, 1994)に関し, 主成分分析を行った結果, 鈴木(1994)の結果とほぼ同様な一因子構造(第1因子の固有値5.30, 第2因子の固有値1.99, 第3因子の固有値1.09)を示したため, 主成分負荷量が.40以下の3項目を除外した12項目で尺度を構成した($M=3.79, SD=0.68, \alpha=.87$)。

現在の夫婦別姓賛成態度 NHK世論調査部(2014)の「1.当然, 妻が姓を改めて, 夫のほうの姓

を名乗るべきだ」, 「2.現状では, 妻が姓を改めて, 夫のほうの姓を名乗ったほうがよい」, 「3.夫婦は同じ姓を名乗るべきだが, どちらが姓を改めてもよい」までのいずれかに「はい」と回答した場合に, 「夫婦同姓」賛成態度とし, 「4.わざわざ一方に合わせる必要はなく, 夫と妻は別々の姓のまままでよい」を「夫婦別姓」賛成態度とした。その結果, 夫婦同姓賛成者は 60.0%で, 夫婦別姓賛成者は 25.8%であり, その他は 7.4%あり, 無回答は 6.8%であった。

改姓時の気持ちと平等的な性役割態度の相関 改姓時の気持ちの 3 因子と平等的な性役割態度との相関分析を行った。第 1 因子の「旧姓への未練と喪失感」は, 「新姓の自分らしくない感覚」と正の相関 ($r=.63, p<.001$), 「新姓の一体感と喜び」と負の相関 ($r=-.23, p<.001$), 平等的な性役割態度と正の相関 ($r=.16, p<.001$) を示した。第 2 因子の「新姓の自分らしくない感覚」は, 「新姓の一体感と喜び」と負の相関 ($r=-.23, p<.001$), 平等的な性役割態度と正の相関 ($r=.24, p<.001$) を示した。第 3 因子の「新姓の一体感と喜び」は, 平等的な性役割態度と負の相関 ($r=-.27, p<.001$) を示した。その結果を Table2 に示す。

Table 2 改姓時の気持ちと平等的な性役割態度の相関

	2	3	4
1.旧姓への未練と喪失感	.63 ***	-.23 ***	.16 ***
2.新姓の自分らしくない感覚	—	-.23 ***	.24 ***
3.新姓の一体感と喜び		—	-.27 ***
4.平等主義的性役割態度			—

*** $p<.001$, ** $p<.01$, * $p<.05$

改姓時の気持ちと仕事の有無との関係

第二の目的に基づき, 改姓時の気持ち各因子の合成得点について, 仕事を持つ人と無職の人に対し, 対応のない t 検定を行った。有意水準は Bonferroni の切り下げにより, 1.67 (=5/3) %とした。「旧姓への未練と喪失感」においては, 仕事を持つ人 ($M=1.90, SD=0.60$) は無職の人 ($M=1.73, SD=0.60$) より高かった ($t(302)=2.13, p=.034, d=0.30$)。「新姓の自分らしくない感覚」においては, 仕事を持つ人 ($M=2.82, SD=0.78$) は無職の人 ($M=2.34, SD=0.83$) より高かった ($t(302)=4.35, p=.000, d=0.61$)。「新姓の一体感と喜び」においては, 仕事を持つ人 ($M=2.26, SD=0.69$) は無職の人 ($M=2.51, SD=0.73$) より低かった ($t(302)=2.47, p=.014, d=0.36$)。

改姓時の気持ちが現在の夫婦別姓賛成態度に及ぼす影響

第三の目的に基づき, 現在の夫婦別姓賛成態度を目的変数とし, 改姓時の気持ちの 3 因子および平等的な性役割態度を独立変数として, ロジスティック回帰分析を行った。その結果を Table3 に示す。モデル係数のオムニバス検定は 0.01%水準で有意となり, 回帰式の有意性が保証される結果が得られた。Hosmer と Lemeshow の検定の結果は有意確率が 0.16 であり, モデルの適合度も保証された。「新姓の自分らしくない感覚」は現在の夫婦別姓賛成に正の影響を与え (オッズ比=2.38, $p=.001$),

「新姓の一体感と喜び」は現在の夫婦別姓賛成に負の影響を与えた（オッズ比=.33, $p=.000$ ）。「旧姓への未練と喪失感」は影響を与えていなかった（オッズ比=1.18, $p=.599$ ）。また、平等的性役割態度は現在の夫婦別姓賛成に正の影響を与えた（オッズ比=2.14, $p=.003$ ）。各影響の強さで比較すると、「新姓の一体感と喜び」が現在の夫婦別姓賛成態度に最も強い影響を与え、「新姓の自分らしくない感覚」と平等的性役割態度が現在の夫婦別姓賛成態度に同じくらい強さの影響を与えた。

Table 3 改姓時の気持ちと平等的性役割態度が現在の夫婦別姓賛成態度に及ぼす影響

独立変数	偏回帰係数	オッズ比	95%信頼区間		有意確率
			下限	上限	
旧姓への未練と喪失感	.17	1.18	.64	2.19	.599 <i>ns</i>
新姓の自分らしくない感覚	.87	2.38	1.46	3.90	.001 **
新姓の一体感と喜び	-1.12	.33	.20	.54	.000 ***
平等的性役割態度	.76	2.14	1.31	3.51	.003 **

*** $p<.001$, ** $p<.01$, * $p<.05$

考 察

第一の目的として改姓時の気持ちを検討した結果、旧姓を名乗られなくて違和感があり寂しさを感じる気持ち（旧姓への未練と喪失感）、社会で新姓を使う時に自分ではないように感じる気持ち（新姓の自分らしくない感覚）、そして新姓を使うことによる新家族との一体感や喜び（新姓の一体感と喜び）が見られた。改姓時の気持ちの各因子は、平等的な性役割態度と有意な相関を示し、尺度の基準関連妥当性がある程度確認された。仮説1は支持された。

各気持ちの平均値を見ていくと、「旧姓への未練と喪失感」は、平均値が理論的中間値より低く、旧姓を手放すことは概ね受け入れられていることが推察される。一方、同じくネガティブな気持ちである「新姓の自分らしくない感覚」は、平均値が理論的中間値より高く、女性が新姓を受け入れる過程で自分を見失うネガティブな気持ちが生じやすいことを示唆し、先行研究で示されたアイデンティティの喪失感と一定の対応をし、改姓が女性に精神的な負担をもたらすことが明らかになった。上記二つの気持ちの平均値の違いは、96%の日本人女性は結婚時に改姓している（厚生労働省, 2016）という事実に関連すると考えられる。つまり、女性は結婚して旧姓を手放すことを社会の常識として観念的に受け入れている一方、実際に新姓を使う時には自分を見失うような違和感がある、という解釈が考えられる。また、平均値は理論的中間値よりやや低いものの、「新姓の一体感と喜び」も見られ、先行研究と同様に、改姓は女性に新しい家族とのつながりを感じさせ、ポジティブな影響をもたらす可能性も示された。

また、各気持ちの年代差を見ていくと、「旧姓への未練と喪失感」および「新姓の一体感と喜び」

には年代差がなく、改姓意識は年代と関連がない（例えば、Scheuble et al., 2012）という先行研究の結果と一致していた。一方、「新姓の自分らしくない感覚」において、若い人ほど高いという結果が見られた。これは世代間の改姓意識の差によるものか、それとも新姓に慣れる時間の差だけなのか、今後の研究で解明されることを期待する。

第二の目的として、改姓時の気持ちと仕事の有無との関連を検討した結果、改姓時有職の女性は無職の女性より、旧姓への未練と喪失感、および新姓の自分らしくない感覚の得点が高く、新姓の一体感と喜びの得点が低いことが示され、有職女性は改姓時に精神的な負担をより感じていることが明らかになった。この結果は前述した先行研究と一致し、改姓は女性の社会進出に負の影響を与える可能性が推察される。仮説2は支持された。

第三の目的として、改姓時の気持ちと現在の夫婦別姓態度に及ぼす影響を検討した。その結果、新姓の自分らしくない感覚は夫婦別姓の賛成態度を高め、新姓の一体感と喜びは夫婦別姓の賛成態度を低めた。平等的性役割態度は夫婦別姓の賛成態度を高めた。以上は仮説3に合致しているが、旧姓への未練と喪失感と夫婦別姓態度に影響を及ぼしていなかった結果は、仮説3に合致しなかった。ゆえに、仮説3は部分的に支持された。

旧姓への未練と喪失感が夫婦別姓態度に影響を及ぼさなかったという結果は、著者らの予想外であった。これは前述した、旧姓を手放すことが日本人の女性に受け入れられていることに由来する可能性がある。つまり、女性たちは社会の慣習により、いつか旧姓を手放すことを覚悟しているので、手放す時に未練と喪失感が生じにくく、その後の夫婦別姓態度にも影響を及ぼさないことが推察される。一方、新姓の自分らしくない感覚が現在の夫婦別姓賛成態度を高めたという結果は、実際新姓を使ってみると、自分らしくない感覚が生じ、しかもその違和感が根強く存続し、時間が経つとともに、改姓へのネガティブな態度を形成させていくことを示唆した。

また、新姓の一体感と喜びは現在の夫婦別姓賛成態度を低めただけでなく、新姓の自分らしくない感覚および平等的性役割態度よりも現在の夫婦別姓態度に強い影響を及ぼしたという結果も、著者らの予想外であった。これは、改姓時に新姓の一体感と喜びを感じた女性たちは夫婦同姓の信念を強く持ち続け、時間が経つとともに、改姓へのポジティブな態度を形成させていくことを示唆した。改姓伝統を維持する要因として、従来は改姓しない人に対するネガティブな社会評価（Robnett et al., 2016 ; Robnett et al., 2017）が検討されてきた。しかし今回の結果により、女性が改姓時に感じた新家族との一体感や喜びなどのポジティブな気持ちも、維持要因の一つとなり得ることが示唆された。

研究の社会的な意義

本研究は、女性が改姓する時に、新姓が自分らしくないというネガティブな気持ちを感じやすく、しかも有職女性には特に強いことを明らかにした。この結果によって、改姓が女性に心理的な負担を与える可能性、および女性の社会進出を阻害する可能性が示唆された。

他には、改姓時に感じた違和感と喜びの気持ちと、それぞれ現在の夫婦別姓態度に正と負の影響を及ぼすことを明らかにした。

以上の結果は、夫婦別姓に関する議論に新たな視点をもたらすと考えられる。

今後の課題

第一に、本研究が行われたのは2015年であり、現在まで8年近く経つ。この数年間、夫婦同姓に対する女性の態度に変化が生じる可能性もあるので、より新しいデータを取り、本研究との比較を含め、新たな検討が必要であろう。

第二に、本研究の年齢層は40代が最も多く(41.5%)、20代と30代(20.7%)が比較的少ない。若い人ほど新姓の自分らしくない感覚が強いという年代差が見られたため、今後は、より若い世代に焦点を当てた研究も必要であると考えられる。また、本研究では、回顧法で改姓時の気持ちを測定したが、改姓直後の測定はより精確に改姓時の気持ちを捉えられるので、例えば結婚直後(例えば半年以内)の女性を対象とする研究も今後望ましい。

第三に、本研究では「旧姓への未練と喪失感」は生じにくく、別姓賛成態度にも影響を与えていなかった。しかし Boxer and Gritsenko (2005) の研究では、アメリカとロシアでは、旧姓は個人の民族的アイデンティティを代表し、手放すことに後悔する人もいることが示された。このことから、改姓時の気持ちとその影響には、文化差が存在する可能性がある。今後は改姓伝統のある他国と比較をし、改姓がもたらす心理的な影響における文化的共通性や日本の特徴を明確にすることが望ましい。

利益相反に関して

本論文に関して、開示すべき利益相反関連事項はない。

謝辞

筑波大学人間系松井豊教授のご指導に感謝致します。また、ご助言下さった埼玉大学人文社会科学研究科の中本進一教授、調査に快くご協力下さった女性の方々、特に埼玉大学なんでも相談室の田辺清美様および他の教職員の方々に感謝致します。

引用文献

- 赤石千衣子 (1997) . 家族法改正を考える (第3回講演, 女性学の視点で見るわれわれの現在) . 女性学連続講演会, 1, 24-34.
- Albrecht, S., & Cornwall, M. (1989) . Life events and religious change. *Review of Religious Research*, 31, 23-38.
- Boxer, D., & Gritsenko, E. (2005) . Women and surnames across cultures: Reconstituting identity in marriage. *Women and language*, 28, 1-11.
- Dralle, P. W., & Mackiewicz, K. (1981) . Psychological impact of women's name change at marriage: Literature review and implications for further study. *The American Journal of Family Therapy*, 9, 50-55.
- Duncan, S., Ellingsæter, A.L., & Carter, J. (2020) . Understanding tradition: Marital name change in Britain and Norway. *Sociological Research Online*, 25, 438 - 455.
- Etaugh, C., Bridges, J.S., Cummings-Hill, M., & Cohen, J. (1999) . "Names can never hurt me?". *Psychology of Women Quarterly*, 23, 819 - 823.
- Falk, A. (1975, 1976) . Identity and name changes. *Psychoanalytic Review*, 62, 647-657.
- Farley, J. (1970) . Women going back to work: Preliminary problems. *Journal of Employment Counseling*, 7, 130-136.
- Farley, J. (1975) . Married women's name styles and interest in continuing education. *Journal of Employment Counseling*, 12, 91-95.
- Hamilton, L., Geist, C., & Powell, B. (2011) . Marital name change as a window into gender attitudes. *Gender & Society*, 25, 145-175.
- Hoffnung, M. (2006) . What's in a name? Marital name choice revisited. *Sex Roles*, 55, 817-825.
- Hussain, A., Weisaeth, L., & Heir, T. (2011) . Changes in religious beliefs and the relation of religiosity to posttraumatic stress and life satisfaction after a natural disaster. *Social Psychiatry and Psychiatric Epidemiology*, 46, 1027-1032.
- Johnson, D. R., & Scheuble, L. K. (1995) . Women's marital naming in two generations: a national study. *Journal of Marriage and Family*, 57, 724-732.
- 菊池慶子 (2009) . 婚姻時の夫婦別姓選択をめぐる葛藤と振る舞い. 奈良女子大学社会学論集, 16, 145-163.
- 厚生労働省 (2016) . 平成 28 年度人口動態統計特殊報告「婚姻に関する統計」の概況
<https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/jinkou/tokusyu/konin16/index.html> (2021 年 6 月 3 日取得)
- Maher, J. (1999) . Fufu Bessei: Marriage and Change-Name Policy in Japan. *The Japanese Journal of Language in Society*, 2, 25-36.
- NHK 世論調査部 (2014) . 「第 9 回日本人の意識調査」放送研究と調査
<https://www.nhk.or.jp/bunken/summary/yoron/social/pdf/140520.pdf> (2015 年 6 月 1 日取得)
- Robnett, R. D., & Leaper, C. (2013) . "Girls don't propose! Ew." a mixed methods examination of marriage tradition preferences and benevolent sexism in emerging adults. *Journal of Adolescent Research*, 28, 96-121.

- Robnett, R. D., Underwood, C. R., Nelson, P. A., & Anderson, K. J. (2016). "She might be afraid of commitment": Perceptions of women who retain their surname after marriage. *Sex Roles, 75*, 500–513.
- Robnett, R. D., Wertheimer, M., & Tenenbaum, H. (2018). Does a woman's marital surname choice influence perceptions of her husband? *Sex Roles, 79*, 59-71.
- Scheuble, L. K., Johnson, D. R., & Johnson, K. M. (2012). Marital name changing attitudes and plans of college students: Comparing change over time and across regions. *Sex Roles, 66*, 282–292.
- Suzuki, A. (1991). Predictors of women's sex role attitudes across two cultures: United States and Japan. *Japanese Psychological Research, 33*, 126-133.
- 鈴木淳子 (1994). 平等主義的性役割態度スケール短縮版 (SESRA-S) の作成. 心理学研究, 65, 34-41.
- 榊原富士子 (1992). 夫婦別姓の動向. こころの健康, 7, 48-51.
- 高村和代 (1997). 課題探求時におけるアイデンティティの変容プロセスについて. 教育心理学研究, 45, 243-253.
- Taniguchi, H., Kaufman, G. (2020). Attitudes toward married persons' surnames in twenty-first century Japan. *Gender Issues, 37*, 205–222.
- Thornton, A., Alwin, D. F., & Cambum, D. (1983). Causes and consequences of sex-role attitudes and attitude change. *American Sociological Review, 48*, 211-227.
- Tsumagari, Y., Yamaguchi, H. (2013). Improving future work motivation by reflecting on past experiences. *Kyushu University Psychological Research, 14*, 9-17.
- 浦上昌則 (1996). 就職活動を通しての自己成長—女子短大生の場合—. 教育心理学研究, 44, 400-409.